

六花



RIKWA

4

俳句雑誌りつか

2016 (平成28年)

cover design Yuna Mizuno

山田六甲

春の鳶

印

豊満な湖北の風よ梅の花
夕暮れの湖をあかりに梅の花
一 点 一 点 滅 春 灯
島影と思へてきたる春の闇
五分咲きの梅に蕾の五分はあり
わかさぎの余呉に生まれて釣られけり
おぼろなる月の低かり賤ヶ岳
如月の小浜下根来に雨ふれる
春の鳶若狭の国へはみ出しぬ
水送りまでに三日を余すのみ

結界の竹に雨降る二月尽
雪解水ならの都へ潜り口
一の宮雪解の音の中にあり
ちらとみてちらちらと鳩日暮れけり
一舟の水脈細く鯰挿しに行く
吾に背を見せてをりたる春の蠅
なれなれし手のひらを這ふ春の蠅
沈丁や佛いぢりに明け暮れて
紙芝居桜の下を通りけり

岩肌の水の匂へる淑気かな
箒目のしぐれてきたる御陵かな
陵杜のねぐら発ちたる初鶉
門松の底の湿りや石畳
千本の裸ざくらのほのぬくし
餅花の影につまづく女かな
見慣れたる海峡なれど初景色
脱ぎ捨てし春著にのこる子の匂ひ
病む夫に手波をおくる初湯かな
あづけたる夫よりメール女正月

薄氷に日の輪郭のありにけり

升田ヤス子

うすらひにひのりんかくのありにけり　ますだやすこ

目覚めけり二日のとろろ播る音に

咲きながら傷みつつじの返り花

物置の子芋にかくれ嫁が君

軽トラで注連を貰ひて来りけり

薄氷に日の輪郭のありにけり

俳句をする人も、しない人もこの景を解らないという人はないだろう。薄氷は「うすらい」と訓み、一方で「うすごおり」ともいう。氷ではあるが冬ではなく春の薄く張った氷の事である。薄くて春の朝日が当たればすぐに解ける。優いけれど明るい日差しだから無常感は薄い。金色に縁取られた鏡だと言外に含ませている。明鏡止水の心地とはこれ。薄氷を縁取る日の輪郭だけを言うにとどめたところが夢風撰の価たる所以。編集長の面目躍如。

空薫の花蠟梅の一枝かな

田尻 勝子

空薫の花蠟梅の一枝かな

池の面の臆たけてゐて薄氷

心の字は象形文字よ春の海

署長官舎見越の松の淑気かな

楠若葉天の言霊受信巾

そらだきのはなろうばいのひとえかな たじりかつこ

「空薫き」とは「そらだき」と訓む。「今昔物語」や「空薫くゆらかして旅のやどりともおぼえず心にくし」（飛鳥井雅有日記）などに出てくる。前もって焚くか別室で焚くかして、どこからともなく匂ってくるように香を焚きくゆらすこと。この句の場合は蠟梅の枝を直接客間に生けるのでなく空薫のならいで隣の部屋に意図的に床しく生けた。ほんのりと薫の届くようとする亭主のもてなしに粹と気品があり、風情を感じさせる趣向。

雪卿集

落葉風

佐津のぼる

元日や微醺ともなひ回診医
反りかへりつつ火となれる落葉かな
吹かれては乾く落葉のころがれる
落葉風乾きつぐ日の土ぼこり
探梅や農家に借りる外側

氷彫

松本文一郎

木守柿一つと言はず十個ほど
去年今年中の下の下のわが暮し
淑氣充つ庚申塚の榊かな
氷彫の龍虎の融けて相打ちに
逃げてまたひとかたまりの寒雀

雪卿集

吊し柿

志方
章子

車屋の稼ぎどきなる紅葉晴
城の屋根見ゆる紅葉の木立かな
焼栗の湯気をほのかに紙袋
一竿の出来の違へる吊し柿
冬ざれや花屋は色を溢れしめ

寒
夜

出
口

誠

烏かと見ればビニール冬の暮
寒夜かな洗濯物をたたむ父
家の者三方向に寝るこたつ
寒風の夜に歩く人まばらなり
熱爛の透明にして我酔はす

雪樹集

松が枝

住田千代子

うすほこり被つて枇杷の花咲けり
初御空松が枝のその先の先
置くだけの靴を磨いて去年今年
初縫ひの糸の滲める針の孔
綾取りのもちつきの糸纏れをり

壺 焼

溝 渕 弘 志

駅裏へ小走りにしておでん酒
壺焼や煮え滾る汁舌火傷
威勢よく熱爛刺身お待ちどう
年賀状幸多かれと宛名書く
生きている証届ける年賀状

蛍雪譚

六甲選



二十八年四月号鑑賞

吟行はスケッチの手段にすぎない。しかし、スケッチでも平面的で、五感のスケッチであることを忘れがち。立体的五感のスケッチとは主観写生の句。紙にメモを取らずその場面を頭に刻み込んで、のち思い起こしながら句を詠むのは、頭の体操になるし、吟行から帰って机の上に坐して、その感動を3Dのように再現するのは実に楽しい。梅の匂い、湖の波音、鴨の声、春の雨音、雪解の水音、風音、足許の雪解の湿ったじめじめ感の春泥、水頭膾（鮭の軟骨）の食感、すべて目と耳と鼻と肌と舌と意をフル回転して蘇らせる。メモを使わず、この光景がこの世の見納めという一期一会の決心で対峙する。その覚悟が只今臨終の思いで見える景を脳裏に焼き付けられるのだ。見納めの光景と思えばいとおしさも十倍になろう。だが、それを繰り返すことは飽きが来るので、自らを刺激鼓舞する読者を想定するのも一つの方法。読者は誰でもいい。一番よき理解者はもう一人の客観的自己。もう一人のよき理解者は作品に厳しい主宰など。推敲は、例えばシチューを煮込むようにとろりととろりと気長に煮込む。あるていど煮込んだところで、一日寝かせておく。熟成はもう一つの調味料でカレーやシチューに同じ。むかし神戸三宮楽天地にあったカレー専門の店「ローレル」の味は絶品だった。オーナーシエフは元神戸オリエンタルホテルのコックをしていた人。「美味しくなるコツは？」と訊いたら、俺が知りたい……、とつぶやきながら「一旦休ませること」と言った。焼いた陶器はじっくりと冷ます。いきなり外気に触れると割れる、に通じよう？。さて、セザンヌはサントビクトワール山の絵を果てしなく描き続け、妻を五百枚以上描いたという話もある。話変わって「粟田讚岐守兼房といふ

人有りけり」和歌を上手になりたいと、常に柿本人麻呂を心に強く念じていたら、ある夜の夢で、西坂本という所に、木はないけれど梅の花が雪のように散って、佳い香りが漂う。わー幸せだなあとうっとりしていて、ふと気が付いたら、横に直衣(官服)とはいえよれよれでうす青いろの指貫(縫物用ではなく袴しぼり)、紅の下袴をきて、形の崩れた烏帽子をかぶっている。何じやこの老人は、と見るに左の手に紙、右の手に筆を染めて、歌を考えているようだった。誰れじやるかいなど思っていぶかしんでいると、この老人が、「年比人麻呂を心(こゝろ)にかけ給へる、其のころざし深きにより、形を見え奉る」と言つてざつと姿を消してしもうた。ありや、夢じゃつたんかいな、と思うたがすぐに、絵師を呼び、夢の様子をあれこれ説明して描かせたけど、夢の場面がうまく再現出来きんのじや。何度も書き直して貰うてやつとできあがつた人麻呂様の絵を宝として床の間に掛け、その絵を毎日のように拝んじやつたら前よりもぼつけえ歌が詠めるようになった。と「十訓抄第四二」に書いてあるげな。男は絵師に夢の子細を説明しているときに右脳が活発になつてその場面が蘇つたにちがひなかるう。

車屋の稼ぎどきなる紅葉晴

志方 章子

車屋とはあの「ねえ俵屋さん」の人力車。紅葉の時期は京の嵯峨野は大にぎわい。俵屋さんは大忙し「好・鬼口甘!」「很好・好到極!」と中華人民共和国の爆客は歓声をあげる。あまり綺麗を連発されると楓は恥ずかしがつて真つ赤になる。英語だつたら exceedingly excellent ーこゝろか。たしかに稼ぎ時で俵屋

もエキサイティング!と大喜び。うん?アメリカ人の俵屋さん。

鳥かと思ればビニール冬の暮

出口 誠

「六花」では一番若手の誠君も花眼になつてしまったのかビニールと鴉と間違えたのである。「花眼」はホアイエンと中国では言い、老眼のこと。森澄雄にも「花眼」(かがん)という句集がある。昔は毛筆文字だったので、今の活字のように眼鏡を必要としない時代があつたのだ。それにしても闇夜に鴉じやわい。

年々に字面良くなる賀状かな

永田万年青

賀状の書き方が毎年上手になつて来た。いわゆる毛筆の手を上げるのではなく、よくよく事情を訊いたら、病気で手が不自由になつた、友人が少しづつ回復して賀状の文字が以前のようになつて来たということだつた。そういう事情は「前書き」を入れるといい。万年青は近く句集を出すと思うからその折にはぜひこの句も前書きを付けて入集しておこう。人一倍友人思いの人情家である。

夫の云へる

目覚めけり二日のとろろ播る音に

升田ヤス子

前書きに「夫の云へる」とある句。細君は正月二日早起きして節料理や雑煮で胃に負担を掛けている家族のために升田家吉例の山芋を播り始めた。家族はその音を聞きつけて目を覚まし、集ま

つてきた。その中でも夫はとろろ汁が好物なのだろう。だから、とろろを播る音と出汁の匂いに夫が「恒例のとろろか！いいなあ。目が覚めたよ」と喜んでいる光景が目に見え、耳に聞こえるようだ。

